

喫煙を始めたのは就職してからのことだ。嫌煙ムードが立ち込める昨今さつこんの時代状況に逆行する形ではあったのだが、とある出来事がきっかけとなって、僕はタバコを吸い始めた。もともと僕自身はタバコを嫌っていなかったし、あのにおいや煙も気にかかるほうではなかった。場所を弁え、節度をもってくれば、とりたてて目くじらを立てるほどでもない。その程度の認識だったと思う。だから、自分が吸い始めることにも、さしたる抵抗はなかった。ちょっと高いな、とは感じなくもなかったが、初めてタバコを買った時分には既にタバコはそれなりに高価になっていたし、幸いにして僕は浪費家というにはほど遠い存在であったので、一ヵ月に一万円ほど出費が嵩んだところで実生活にはなんら影響がなかったのだ。

否、むしろ、一ヵ月に一万円程度の出費で、僕の生活は大きく変わったのかもしれない。それもきつと、いいほうに変わったのだ。

よく「タバコは百害あって一利なし」などといわれるが、とんでもない誤解だ。本当にそうなら誰も喫煙などしてないだろう。タバコに害がないとはいわない。あの悪名高い

副流煙ふくりゅうえんとかいうもののせいで、喫煙者はおろかその周囲の人の健康にも害が及ぶことは、タバコを吸う以上は肝きまに銘めいじておくべきだろうが、一利なしという主張は一面だけを以て全体を切り捨てる愚かな言い回しではないか。梅が嫌いという理由で、梅干しおにぎりをゴミ箱へ捨ててしまうようなものだ。白米や海苔のりの立場はどうなるというのだ。そもそも、吸ってない人間が吸ったこともないものをどうやって知り得るというのだろう。こっちはリスタを承知で、金を払ってまで吸っているのだ。そこになにかがあるのだということぐらひは、できれば汲くみ取ってほしいものだ。

——さてさて、なんてことを吹聴ふいちようすると、ただでさえ弱い喫煙者の立場でありながら余計にいじめられそうなのでこの辺にしておくとして、僕にはもう一つ思うことがある。それは、喫煙者の肩身せまが狭せまくなり購入しづらくなっているならば、売る側にも苦勞が重なっているだろうということだ。

以前は「タバコ屋」といえば、それこそパン屋や肉屋と同じく、町を少し歩くだけで容易たやすく発見できる、普通の店だった気がする。あの妙に小さな窓口で、しわしわの婆さんが退屈たいくつそうに店番をしている、あれだ。僕が幼い時分には、親父に頼まれて使いに走った記憶なんかもおぼろげにある。

ところがだ。どうやら最近ではあの手のタバコ屋が都心だと絶滅危懼種に指定されかねないというのではないか。それはつまり店番をしていた婆さんたちがそろそろ天に召される

お年に差しかかりつつある——というわけではなくて、このところの嫌煙ムードや、タバコの値上がりが原因なのだろう。なによりも、今となってはわざわざタバコ屋に行かなくとも、コンビニエンスストアへ行けば事足りるのだ。便利な世の中になったものだが、なにかが変われば、その変化の波は必ずどこかに打ち寄せるものらしい。僕個人としては、そんな世の中の流れは、なんだかちよつと味気ない気がしてあまり好きになれないのだが。やはり、パン屋のパンはふっくらしているし、肉屋の肉はムッチリしているものだと思う。それが専門店ってものだ。

そう、タバコ屋で買うハイライトは——うむ。立派なハイライトだ。まあ、ハイライトはハイライトなのだけと。コンビニで買っても。

それでも僕は、街角のタバコ屋は風情ふんせいがあつて好きだ。なにか懐なつかしいにおいがする。単なるタバコのおいかもしれない。しかし、ともかく、ひいきにしているタバコ屋というのは、一時ひとときの安らぎを得られるオアシスなのだ。

オアシスの水で、僕の一日は幕を開ける。駅までの道中にある、荒波に耐えつつ生き残っている貴重なタバコ屋だ。出社前、僕はいつもそこでハイライトを一箱買い、一服する。そうすることで、ようやく頭のスイッチが入るのだ。まるでパブプロフの犬みたいだけれど、スイッチというものは決まった場所にあるほうが都合がいいに決まっている。

それに、そのタバコ屋には、僕にとってささやかなお楽しみがあった。実際に足を運ん

でみないと分からない、ちょっとした運試うんたためし。朝の情報番組の星座占いみたいなものかも
しれない。

てくてくてく。さて、今日はどっちかね？

道路の曲がり角の手前で、古ぼけた看板が見えてくる。平仮名で「た」「ば」「こ」の三
文字。分かりやすくいい。

こんこんこん。僕はあえて、小さな窓口を覗のぞき込まないように気をつけながら軽くノッ
クした。間を置かず、鈴が鳴るような澄んだ声で返答があつた。

「いらっしやい」

——よし。

今日は、アタリの日だ。

窓口を目をやると、中学生くらいの少女が、ちょっと眠ねそうな顔をして頬杖ほおづえをついてい
た。

年相応の黒髪が、肩の辺りまである。前髪は長め。艶つやのある髪色に対して、肌の色はこ
ちらが少し心配になってしまいうくらい白い。ことに、頬に添えられたその指先は、触れれ
ば溶けてしまいうくらいだった。

看板娘という表現が、近くて遠い感じ。

「おはよう。ハイライトを一つ、もらえるかな」

「ハイライトね。四百十円です」

窓口の奥で、少女の身体がもそもそと動く。ハイライトが置かれているのは、少女の背中側にある棚だ。もう覚えてしまった。

「はい、どーぞ」

「ありがとう。じゃあ、千円で」

小銭入れを探ればちょうどあったかもしれないが、僕は必ずお札で支払うことにしている。万札があれば、万札で払う。店にとっては迷惑な客かもしれないけれど。

「はい。じゃあ、えー、お釣り」

そういって少女は釣り銭受けの上に、じゃらじゃらと小銭を落としていった。お釣りを渡すとき、この子はいつも釣り銭受けの上にかけてから数えるのだ。非効率極まりない癖だが、僕はそんなのんびりした風景を楽しんでいた。

「ん……と。はい。五百九十円、お返し」

「どうもありがとう」

お札をいってから僕はガードレールに体重を預け、買ったばかりのハイライトを開封した。ちょうど正面に少女が見える位置関係だ。相変わらず、この子は眠たそうな目をしている。少女の睫は長く、細い。それがしばしばと、閉じたり開いたりしている。

口に啜え、懐から取り出した百円ライターを点火したときだった。

「……オジさんさ」

店番の少女が話しかけてきた。僕は心臓が早鐘はやがねを打つのを感じつつも、タバコを口から外した。

——なんということだ。

少女に、話しかけられてしまった。

「……僕はまだ、オジさんじゃない」

「えー、オジさん、いくつ？」

「二十六歳」

あと幾日かしたら、もう一つ齡よわいを重ねるのだが。

「あたしの倍近く生きてるじゃん。やっぱ、オジさんだよ」

「オジさんというのは、三十歳以上の男性を指す言葉なんだ」

「それは、オッサン」

「君は接客態度を改める必要がある」

僕がそういうと、少女はくすりと笑みをこぼした。少女が、僕との会話で笑っている。

僕はともすればゲシュタルト崩壊しそうな顔面の筋肉を、きりりと引き締めるのに心を砕くだいた。

「じゃあさ、なんて呼べば正解？」

これはセンスの問われる問題だ。お兄さんではあまりにベタだし、お兄ちゃんでは変態を疑われる。

「……お、お……」

「お？」

「オバンドー」

「はい？」

「オバンドー。一九九九年から二〇〇五年にかけて日本ハムファイターズでプレーした外国人選手。日本での通算打率は二割九分四厘。好打者だが、怪我が多かった」

少女は全く笑っていないかった。当然だ。

「別人じゃん」

「彼の愛称は、オバ様だったんだ」

「だから？」

思いの外、少女は手厳しかった。僕はこれ以上オバ様で引っ張りたくなかったが、いかにせん身から出た錆であった。

「——海野。僕の名字」

「ふーん。ウミノはさ」

「呼び捨てか」と、突っ込みつつ、内心嬉しい。

「ウミノは、なんの仕事してんの？　これから仕事なんでしょ？！」

僕は思案して、今度はこう答えた。

「お客様に、煌びやかな夢の旅を提供する仕事」

「旅行会社？」

「そんなところ」

そのとき、タバコの火がフィルターにまで迫っていることに気付いた。そういえば、まだほとんど吸っていない。もったいないので、僕はハイライトを啜えて一度大きく吸い込んだ。深く重たい味が僕の肺へ下ってゆく。同時に、腕時計に目をやった。そろそろ電車が来る時間だった。

非常に名残惜しいが、今朝の一服は終わりだ。

「さて。ぼちぼち行くよ」

吸い殻を店の備え付けの灰皿へ落としてから、僕は伸びを一つした。少女に「それじゃ」と短く別れを告げて、店に背を向けたとき、後ろから再び澄んだ声が聞こえた。

「あーそうだ、ウミノ。あたし、さなえ」

「？」

振り向くと、少女はやはり眠たそうな目をして、頬杖をつき、そして微笑んでいた。

「あたしの名前。そんなじゃ、これからも当店をごひーきに」

僕は頷うなずいてから、改めて少女に小さく手を振った。それから、今度こそ店を後にして早足で駅へと向かい歩き出す。

——さなえ、か。

なんだろう。

なんだか、いいことがありそうだ。

2

「すまんなキムラ。焼き鳥で」

「いや、いいよ焼き鳥で。なんで謝あやまってんだ？」

僕はぐるりと首を回し、飲み屋特有の喧けんそう噪の中へ視線を投げた。客のほとんどがスーツ姿だ。きつと僕たちと同じく、会社帰りの人心地ひんしんちといったところなのだろう。店内には紫煙えんが充満している。今時、全席喫煙席という事実が、ここがどういった場所かということ容易おほに推し量はからせた。

僕は手にした品書きをしばしばと覗き込んだ。マジックで書いてあるところなんか、いかにも場末の焼き鳥屋らしい。

「なぜって、ここの品書きにはキムチがない」

「俺、そんなキムチ好きじゃねえぞ」

対面トイメンに座っているこの男はキムチといって、下の名前は未だいまだにうろ覚えだが、庶民的な名前を持ちながらも僕の一・七倍くらいの仕事量を誇る、優れすぐもののデキる男だった。一部では将来の重役候補だとか噂うわさされている、らしい。顔もそこそこだし、きつとそつちのほうでもなかなか優れものなんだろう、と思う。

ただ、ことのほか付き合いのいい男であり、同期の僕ともわりとよく飲んだり遊んだりする。僕が社内でプライベートルドでの関わりがある数少ない友人だ。ちなみに、同期の幾人かは彼をキムチと呼ぶ。微笑ましいことだ。

「だいたい、歳暮の大半がキムチだったんだ。いい加減うんざりしている」

「ああ、僕が皆にお願いしてまわったからな」

「お前のせいだよ！」

「友人のために、骨を折った」

「さらに折ってやろうか」

ほんのジャブ的な冗談をいいあった折り、生ビールと鶏串とりぐしが運ばれてきた。僕たちはジョッキをかちんと合わせてから、ビールを喉のどへ流し込む。炭酸がちりちりと弾はじけ、仕事の疲れと共に胃の奥へ沈んだ。

「うーい。やっぱ生だぜー」

「キムラ。僕は横山三国志のキャラ以外で、酒を飲んで『うーい』とうなる男は未だ君しか知らないよ」

「うーい。ちょっと夜風にあたってくるぜーい。ヒック」

「キムラ。早いよ」

このあたりのノリのいいところが、キムラのういところである。うーい。いかんいかん。僕ももう悪酔いしている。

僕たちはしばらく、上司や新人の愚痴をいいつつ、鶏串を食した。ちなみに、僕はタレ派、キムラは塩派である。タレ派はお子様と見下す上司がいたが、人の好みに口を出すほうがお子様とやってやりたい。

「今日、その子が名前を覚えてくれたんだ。さなえだって、さなえ。情緒ある名前じゃないか。あれは、間違いない子だよ。ほら、よくいうだろ。名は体を表すってやつだ」
僕は今朝方、いつものタバコ屋であったことについてキムラに話していた。大変心温まるストーリーだと僕個人は評価していたのだが、生憎聞き手のキムラは若干渋い顔をしている。

キムラの灰皿は既に満杯に近づいていた。彼はヘビースモーカーなのだ。僕が喫煙を始めた原因の一端は彼にもあるとあってよい。女性受けするキムラではあるが、喫煙は僅かな弱点の一つかもしれない。もっとも、男性の僕から見ても彼がタバコを吸う様はなかな

かに画えになつてゐる。指先から色気がにおい立たつてゐるのだ。

「……ウミノ。お前さ」

「なんだ」

「まあ、あれだ。その手の話は、社内ではやめとけよ」

「む。忘れていた。皮を食おう。皮。皮はやっぱタレだな」

「それから、法にだけは絶対に触れるなよ。会社のためにも」

「キムラ。こう見えて、僕は友達を選んでゐる。つまり、僕はこれでけっこう君を信頼しているんだ」

「いや、まあ今のは俺が悪かったよ。よし、ビールをおごつてやる」

「キムラ、愛してるぞ」

店員を呼んで、ビールを二杯と、鶏皮をオーダーした。

「しかしよう」

「なんだよう」

ネギ塩しほを箸で崩しながら、キムラは再び口を開いた。

「お前、本当にそれでいいのかよ？」

「なにが」

「だって、その子、まだ中学生くらいなんだろ？」

「そうだな。確認したわけではないが、それくらいだ。十四歳という響きがびったりな、淡い雰囲気があるんだ」

「いや、だからな」

「そう。あれから一年だ。今日、僕はついにあの子と心温まる会話をしてみせたうえに、なんとお互いに名前を知りあったんだ。喜ばしい。実に喜ばしいことじゃないか」

「おいおいおいおい」

「ただ、悲しいかな。僕はまだあの子の制服姿を見たことがない。会える場所がタバコ屋限定という条件がネックなんだ。うーむ。どうすべきだろう。キムラ、なにかいい案はないかね。このままあの子が中学校を卒業してしまっただけでは、僕はそのセーラー服姿を見ることなく一生を終えてしまう。そんな人生に、意味はあるのか？」

「はいはいはいストップ！ ストップ！」

「どうしたキムラ。まさか君はブレザー派か？ 生憎、あの辺りにブレザーの中学は」

「黙れロリコン」

失礼な。

「キムラ。その単語は、むやみやたらに使用していいものではないぞ。日本語は、正しく使わなければ駄目だ」

「これ以上なく正確な使用法だと思っせ」

僕は浅学せんがくな友人に対して、肩をすくめてみせた。キムラもお返しとばかりに、僕の真似まねをしてみせる。

「その……よ。いいんだぜ。手を出さないならば、まあ、それはギリギリお前の自由かもしれない。ただな、こう、ほら、社内とかな、身近なところになんたってかわいい子はいるもんだぞ」

「そりゃあ、キムラなら選べるだろうよ。僕が女性だったら、ほっとかないね」

「はぐらかすなよ」

「君の最大の弱点は、名字がしょぼすぎることだがね。籍を入れるのはためらう」

「お前は今、全国の木村氏を敵に回した」

「そりゃ大軍隊だ」

僕がビールに口をつけると、キムラはふっと息を吐いた。彼はいい性格をしており、気も利く。それ故ゆえに、少々お節焼きなところもあるのだ。もちろん、それは彼の優しさなので、僕は煩わづらわしくは思っていない。期待に応えられないのは申し訳ないが。

「よし。今から女子呼ぶぞ」

ふいに顔を上げて、キムラはそう宣言した。

「なに。今から？」

「そうだよ。トゥナイトよ」

「でも、ここって女性の来るようなところじゃないだろ。タバコの煙すごいし。男客しかないぞ」

「だから、場所を移すんだよ」

「いいよ、別に」

「よかない。まあま、俺にまかせとけい」

そうしてキムラは席を立ち、携帯電話を取り出した。こういった行動力や決断力が、彼の仕事ができる所以ゆえんではあるのだが。

「いやはや、キムラは罪作りの男だ」

誰だかは分からないが、おそらく、女性の方が来ることにはなるのだろう。それは、呼び出し主がキムラだからである。

僕がハイライトを一本吸い終わる頃に、キムラが電話を終えて帰ってきた。

「釣れたぞ。二人だ」

「誰？ 知ってる人？」

「社内だよ。ヨシエさんと、もう一人は、なんとあの、みっちゃんだ」

「みっちゃん？ みっちゃんて、あのお茶汲みみっちゃんか？」

『お茶汲みみっちゃん』という微妙にごろが悪いうえに一步間違えると男女差別に引っかかりそうな通り名で呼ばれる女性は、本名は早良美沙さわみという入社二年目の後輩だ。なぜに

かような名付けがその女性に為なされているかといえば、入社当時、右も左も分からなかったみっちゃんはともかくにも暇さえあればお茶を汲みまくり、あまりに汲みすぎるため会社の消耗品を使用するのは申し訳ないと終しまいにはわざわざ自前で茶葉ちやばを持つてきたという逸話いしわによる。真面目で憎めなくはあっても、どこかずれていることは疑いようのない女性である。繁忙期はんぼうき、皆が必死になって仕事をさばく中であって、同じく必死になって湯飲みをさばくみっちゃんの姿は今でも僕の記憶に色鮮やかに残っている。

もっとも、さすがに入社二年目を迎えた今日こんにちでは、みっちゃんもようやくお茶汲み以外の仕事に腐るほどあることを悟さとつたらしく、全盛期ほどのパフォーマンスは見せなくなつた。これには、『お茶汲みみっちゃん』がもたらす華やかな安らぎの一時を常日頃から心待ちにしていた男性社員の一部より悲しみの声もあがっている。

ちなみに、ヨシエさんのほうは昔からキムラと大変仲のよろしい二つ上の先輩だ。すつと整った面立めんたちちにブロンドの長髪がよく似合っていて、思わず「姉御あね」と呼びたくなる。「しかし、ヨシエさんとはかく、みっちゃんはホントに来るかね。単に電話じゃあ断り切れなかつたのでは？　すぐにメールが来るかもよ」

「ないね。必ず来るさ。賭けてもいい」

「さすがに、もてる男は違うな。キムラ」

僕がそういうと、キムラは半ば呆あきれたような顔をした。

「お前なあ……。まあ、いい。移動するぞ。ほら、立った立った」

「はいよ」

急^せかされた僕は重たい腰をあげ、上着を羽織り直した。しかし、こんなにタバコのおいをつけたまま、女性に会うというのもどうなんだろうか。

「さーて、じゃ、とりあえず駅まで行くぞ」

「うーい」

こうして僕たちは焼き鳥屋を後にし、麗^{うるわ}しき大人の女性が待ち受ける大人の場所へと足を向けた。この後、大人な展開が待っているかどうか——は僕には分からない。